

コメント

「台湾パイワン族アチックフィルムと写真」 上映調査の来歴及び当地の評価に関して

Regarding the “Taiwan Paiwan Tribe’s Attic Film and Photos” Film Screening
The Process Leading to the Screening and Survey along with Local Reception

林志仁（余志清 訳／小熊 誠 監訳）

LIN Chih-jen (Translated by YU Zhiqing with Supervision by OGUMA Makoto)

1. 序言及び背景

2010年11月9日、日本の大阪にある国立民族学博物館の友人、野林厚志先生を通して、神奈川大学の小熊誠先生からEメールをいただき、同年12月27、28日の2日間、台湾屏東県瑪家郷と泰武郷における映像調査に関する協力の依頼を受けた。1937年に日本の学者によって撮影された映像資料に関する調査をするにあたり、私は、台湾原住民⁽¹⁾文化教育の仕事に携わる立場から、関係機関の長官である鐘興華局長に、今回の調査作業にはワゴン車、ジープ車それぞれ1台、及び運転手2名の協力が必要であると伝えた。幸いにも鐘局長は十分に御理解くださり、全面的な支援を指示されたため、私もすぐさまこの旨を小熊先生に知らせた。また、私は日本語があまり得意ではないため、この調査協力を順調に進めて所期の目標を実現するために、出身民族であるパイワン族の文化・言語・歴史・社会・自然の各方面において研究業績のある民俗学専門家の華阿財先生を招き、本件の通訳および調整面について協力をお願いしたところ、幸いにもご尽力を賜ることができた。

訪問する予定の集落の手配をした当時は、前年の2009年8月8日に台湾南部が台風8号（モーラコット）⁽²⁾に見舞われたばかりで、その影響がまだ残っていた。この大型台風は高雄及び屏東地域に水災をもたらし、平原に位置するいくつかの郷が浸水し、山間地帯は土石流災害が頻繁に発生していた。南部の山間地帯では通行止め地区が多数でており、孤立した地区もあり、さらには生き埋めになった人々もいた。最も悲惨であったのは高雄県小林村（那馬夏郷ブヌン族集落に近い平埔族群に属す村）であり、一夜にして497名の族人が生き埋めとなり、現在でもなお行方不明のままとなっている。調査予定地の一つであったルカイ族⁽³⁾の阿礼及び大武集落は、隘寮溪北岸に位置し危険区域に属しており、道路が遮断され赴く術がなかった。これらの集落を除く、南岸の瑪家・泰武・佳平集落は、安全に到着できる地区であるため、現地のお年寄りと連絡を取り、訪問場所の手配を済ませ、あとは神奈川大学日本常民文化研究所所長（訳注：当時）佐野賢治博士が率いるチームの到来を待つのみとなった。

2. 現地訪問調査

2010年12月27日（1日目）に調査作業が始まった。午前中はまず泰武郷公所にて映像の視聴を行った。現在の佳平村は、かつて日本統治時代末期に新たに移転してきた村⁽⁴⁾であり、大武山西側山麓に位置し、万金村からの距離は1kmにも満たない、標高100mの村である。当日は佳平村の周氏頭目、お年寄り2名及び現地一般人約6名と共に映像資料を視聴し、調査事項の聞き

書きを行った。映像資料を放映しながら、解釈・説明及び質疑応答を行った。公所の壁には旧佳平社の手書きの集落地図が貼られており、村落における各家の位置が明確にしるされている。その他、館内にはいくつかの骨董品と手工芸品⁽⁵⁾も置かれている。

簡単な昼食を取った後、我々は車で標高 900 m の大武山の山麓に位置する佳平社の跡地に赴き、現地調査を行った。周義男頭目（2013 年逝去、享年 63 歳）の手配により、一人の族人が案内役を務め、先ほど視聴した映像資料の実景について現地調査を行った。その後直ちに下山し、標高 800 m のところにある泰武社（村）に向かい、調査を行った。これは日本統治時代にすでに当地域に存在していた集落であり、華案義先生、顔和先生の 2 人の頭目⁽⁶⁾及び 5 名のお年寄りが調査に加わった。現地では映像資料の上映が困難であったため、写真を用いて聞き書きの資料とし、そこに写されている人物・道具について調査した。2 名の頭目は、コーヒーの自家栽培⁽⁷⁾と焙煎を行っているため、コーヒーを飲みながらの調査であった。夕方になり夕日を追いかけるように来た道を辿り高雄へ戻った。

12 月 28 日（2 日目）の午前は、中北葉旧集落旧跡に行き、現地調査を行った。柳基恩頭目及び長老の尹氏が案内役を務め、調査作業を行った。その後、瑪家集落に行き、大頭目徐春美女史及び当地のお年寄りが聞き書き調査に応じた。午後は、「台湾原住民族文化園區」に行き、博物館、音楽舞踊及びルカイ族神山社頭目家の家屋の石板修復工事⁽⁸⁾を見学した。見学終了後に高雄に戻り、第 1 回目の調査作業を終えた。

2 回目の調査期間は 2011 年 12 月の 18、19 日の 2 日間であった。前回の経験を生かしたこともあり調整は比較的順調に進み、聞き書き調査に参加した人の数も前年を上回った。今回の調査は、一年前の調査で残された確認作業を引き続き行うことを目的としていた。高城先生が私との連絡担当となり、高城先生の依頼により、宿泊先を屏東市富光飯店にした。このホテルは調査地から車で 30 分程度の距離しかないため、往復が便利であり、時間に比較的余裕があった。

12 月 18 日（1 日目）の午前は、私の勤務機関である「台湾原住民族文化園區」の会議室にて映像資料の上映会を行った。瑪家集落大頭目徐春美女史と当地のお年寄りを招き、聞き書き調査を行った。午後は北葉旧集落旧跡と瑪家村に行き、現地調査を行った。

12 月 19 日（2 日目）の午前は、泰武郷佳平村老人会館へ行き、40 名あまりの老人会会員とともに映像資料を視聴し、聞き書きの調査を行った。映像資料の中の人物・品物・入れ物の名称・民族言語の発音の特定に関して、互いに情報を提供し合った。一行は午後には日本へ帰らなければならなかったため、午後 1 時頃に 2 回目の調査作業を終えた。

3. 調査に応じた人々の感想及評価

以上の 2 回の調査作業を総合して、聞き書き調査に応じた方々の反響と体験、及び神奈川大学日本常民文化研究所の研究テーマの持つ意味に対する感想・コメントを、以下のように述べておく。

(1) 映像資料の視聴後の聞き書き調査において、調査された方々は、撮影時期の 1937 年から現在に至るまで、長い年月が経ったにもかかわらず、非常に明確かつ完全に当時のことを記憶されていた。そして、日本の学者達も研究調査のために、労を厭わず、危険を恐れず北大武山麓各パイワン族集落へ入り、貴重な映像を撮影していた。これに対して、言葉では言い表せないほど深く尊敬の念を抱くものであり、敬意を表したいと思う。

(2) 北大武山はパイワン族の聖山であり、祖先の発祥の地⁽⁹⁾であると伝えられているため、調査地の各集落は、お互いに姻戚関係と同盟の契を有している。とりわけ第二次世界大戦終戦前の

20年間に、理蕃政策が概ね重大な進展と成果を得ており、各集落間の紛争が沈静化していく中、首狩の習俗が次第に消滅していった。一方では台湾各地の土着民蕃地に関する研究も猛烈な勢いで進んでいた。フィルムの中に出てきた生活用品、什器、狩猟用の捕獣器及び農耕器具、鉄器、藤製品などの品物、または農作物、例えばサツマイモ、粟、サトイモの栽培と収穫及び焼畑技術などは、大武山西麓の大きな生活圏区域内に属するため、その表現の形式においては共通しており、相違点は極めて少ないと考えられる。衣、食、住、交通、娯楽、舞踊のステップ、狩猟などを含め、物質文化と祭祀儀礼がすべて北パイワン *vuculj* 方式としての様態を呈している。

(3) 1896年から、日本の徳島に住んでいた鳥居龍蔵博士が東京帝国大学の招請により台湾に赴き研究を行い、動物・植物・地質・人類学関連の映像を撮影し、それによって台湾原住民族（土着蕃族）に関する研究は初めて正式に日本の学者と専門家に重視されるようになった。50年間にわたり大量の研究記録が出版・発表され、台湾原住民文化研究の基礎と権威を築き上げた。これらの学者・専門家の研究成果の中には、学术界の誇り高き存在と称するに足るものも多い。また、学術団体及び政府機関の大量の資金投入により、あらゆる資源と方向性を調整・再編することが可能となったからこそ、今日の輝かしい成果が得られたといえる。たとえば、上述の鳥居龍蔵先生の「台湾原住民文化研究與影像」、小川尚義と浅井恵倫先生の「二戦前之言語研究」、伊能嘉矩先生の「台湾文化誌蕃語調査」、馬淵悟先生の「台湾原住民各族人像、体質測量」、湯浅浩史と瀬川孝吉先生の「鄒族影像」、千千岩助太郎先生の「蕃族住屋測繪図与影像」、台湾総督府臨時台湾旧慣調査会研究調査編著『蕃族慣習調査』、鹿野忠雄先生、馬淵東一先生など、学者・専門家が発表した論文は枚挙にいとまがなく、これらは、台湾原住民文化を研究する後継者や後世の族人による自民族の文学・歴史・文献の研究にとって、正確な研究方向を示した、限りない価値を有するものであるといえる。

率直に申し上げるならば、古くから今日に至るまでに、一部の台湾原住民に関する調査研究は、時代背景の転換や資料収集の不足、方向性の不明確さ、選ばれた報告者が文化事象を誇張して解釈したことで生じた主題との乖離、あるいは言葉の溝などの原因により、研究結果が偏っているため、批判される例も少なくない。これは学術研究にとって玉にきずであるといえる。とりわけ16世紀から18世紀にわたってヨーロッパ人による台湾原住民に関する描写、記録、絵画の中には、異族（他者）の想像に満ちているため、大々的に批評・質疑の対象となった。

神奈川大学日本常民文化研究所の研究・調査・記録・整理などの各仕事には、決して上述のようなことはない。ここからみても、貴研究所は優秀なチームとして貴国に重視され、評価されている理由がわかる。学術分野と学界においても、間違いなく高い地位と権威を有していることであろう。

(4) 台湾南部のパイワン族原住民の居住地に関して言えば、日本の大正年間では、日本研究者がその族群を *ravar*、*paumaumaq*、*tjakuvukuvulj*、*paliljaliljau*、*paqaluqalu* の5つの群に分けていた。*ravar* 群を除いて、その他の4つの群は *vuculj* 系群と総称されていた。

貴研究所の研究チームは、2回にわたり台湾へ足を運び、屏東の民族と人物像について現地調査を行い、相当な成果をあげたのである。ただし、調査の時間が短いため、昔の写真などは提供されたものの、族人がそれらを識別することにおいてはなお不十分な点が残っている。問題は、インタビューに応じた族人の先祖は、元々異なる集落の出身で、後にともに現在の集落へ移住してきたことにあるといえよう。族人は、映像資料の中の人物名を認知するすべがなく、確認作業は困難を極めた。そのため、元の名を記されていない写真も少なからず残っており、誠に残念に思う。今後もしもまた機会があれば、写真の展示方法をより普遍的かつ充分なものに変えることを提案する。そうすることを通じて、族人及び長老達が十分かつ詳細に閲覧し議論することができ、より完全な結果を得られるのではないかと考えられる。

一方、展示された全ての写真には、(上述のような群とは)別の群に関連しているものも少なからずあり、その群の関係者が聞き書き調査に参加することができなかったため、遺漏などが残る結果となり、残念に思う。この件に関しては、別の段階で国内の「台湾博物館」、「台湾文学館」、またはその他の著名の図書館・博物館と連携し、「区域を分けて調査する」という方法を取ったほうが妥当ではないかと考える。なぜなら、大武山にある一つの集落が呈した生活像は、他のパイワン族各群、集落のそれぞれの生活像を代表しえないからである。また、現代人による人類の文学・歴史研究の発展は、「地方化」の方向を土台としつつ、それを被調査者の尊厳を尊重する「フィードバック式」研究の手法が補完するものとなっており、それは今日、世界原住民研究の潮流⁽¹⁰⁾になりつつある。そのため、大規模な図書館・博物館は小規模な図書館・博物館と連携して成果を小さな郷村まで普及させ、族人と分かち合う必要性が大いにある。

(5) 今回の2年にわたる調査は、「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」をテーマとし、73年後に再び現地を訪れ、撮影場所(集落)にて聞き書き調査作業を行ったことは、実に重大な意義と価値を有するものである。ここからみても、貴研究チームが調査研究に対して非常に慎重であることがわかる。貴研究チームが学問をする上で、真実の様相及び正確な解釈を探求し、確認を確認を重ね、細大漏らさず追求するその姿勢は、調査を受けたパイワン族頭目及びお年寄りに深く感銘を与えた。感動のあまり、彼らは出来る限りのことを尽くして全力で本研究の調査に協力し、最も真実に近い回答を提供したいと願ってやまなかった。私は、今回の調査は成功した訪問調査であったと思う。

ご周知の通り、台湾土着蕃族(原住民族)が正式に学術的に価値のある研究を有するようになったのは、日本統治時代からであった。それ以前は(例えば中国、ポルトガル、スペイン、オランダ人など)台湾の人文社会に関する文献は少なく、映像資料はほぼ皆無という状況であった。また、原住民自身は文字を持たないため、代々伝承されてきた口承の歴史しか持っていなかった。平埔族の熟蕃活動においても、1624~1662年のオランダ統治時代に、オランダ東インド会社が台南に新港書院を設立し、ローマ字表記によって記された宣教及び学校教育の状況や生活の記録文献が残されているのみである。それらの文書は現在ジャカルタにある「インドネシア国立文書館」に所蔵され、年月の経過、また人為的な理由から、破損しているものも少なからずある。現在本機関は、インドネシアと連携して、整理番号4450、4451、4043の3巻の中の、平埔族(熟蕃)あるいは原住民(生番⁽¹¹⁾)に関連する文献を共同で翻訳しており、近いうちに世に出ることになっている。それは台湾原住民と平埔族の300年前の文化と生活に対する研究・理解を深めることに役立つものである。中には平埔族の力力社集落に関する記載があり、その記載によると、集落の人数は753名であり、80名が洗礼をうけた。学童の学習の状況は以下のとおりである。文字を書ける者は5名、読める者は0名、表音文字で綴ることのできる者は12名、英語アルファベットを学んでいる者は16名、学童数は計33名などである(文書4451 pp.64-65より、査忻訳)。

4. 結論

2回の調査作業とも2日間という短い時間で終わり、一段落したが、集落のお年寄りや頭目らは、またの機会に再び貴研究所のパイワン族研究のために協力的な役割を果たしていきたいと望んでいる。私は、この場をお借りして全ての族人と年長・年輩者を代表し、貴研究所に対して深く感謝の意を表したい。貴研究所の所長及び研究スタッフの皆様のご健康・ご多幸、そして今回の研究会のご成功を心よりお祈り申し上げます。

 附記

人口による統計：現在まで台湾政府当局が公認した原住民は14であり、人口の順に並べると以下の通りとなる。アミ族 192,295 人、パイワン族 92,528 人、タイヤル族 82,880 人、ブヌン族 53,782 人、タロコ族 27,906 人、プユマ族 12,653 人、ルカイ族 12,363 人、セデック族 7,887 人、ツォウ族 6,922 人、サイシャット族 6,132 人、タオ（ヤミ）族 4,279 人、クバラン族 1,290 人、サオ族 719 人、サキザヤ族 648 人、未登記 19,961 人、合計 522,245 人（下線は最近十年内に新たに識別した族名である）。

原住民区域に居住している人口は 293,517 人であり、56.2%を占めている。都市部区域に居住している人口は 228,728 人であり、43.8%を占めている。男性が 255,719 人であり、48.96%を占めている。女性が 266,526 人であり、51.04%を占めている。（以上は 2012 年 4 月までの統計資料である）。

教育レベルによる分布：博士 72 人、修士 987 人、大学・専門学校生 21,158 人、高校生 10,707 人、高等職業訓練学校生 10,043 人、国民中学校 27,029 人、国民小学校 47,255 人（以上は 2011 年 9 月までの国勢調査の統計である）。以上の統計は「中華民国行政院原住民族委員会」が調査・発表したものである。

 注

- (1) 「原住民」とは、台湾政府が「山胞」という呼称を改め、1994 年 8 月 1 日から使用した用語である。日本統治時代は「高砂族」と呼んだ。
- (2) 大型台風が台湾南部および台東を襲い、50 年前の中部八七水災に次ぐ大災害となり、少なくとも 697 人が犠牲となった。
- (3) かつて「高砂族」九族の一つである。プユマ族と共にパイワン族に属する支系である。サイシャット族はタイヤル族に属する支系である。
- (4) 村を移住させる遷村計画は当時の理蕃政策の一つであり、その目的は安全の確保及び管理の便を図るものである。
- (5) 骨董品と手工芸品の多くは、日常生活用品である。工芸は陶芸、瑠璃珠、刺繍、彫刻などである。
- (6) 「頭目制度」はパイワン族社会構造における上層階級の制度である。例えば菱型の最高層は大頭目でその次に二等頭目、三等頭目などが続く（以上は貴族と総称され、家族、親族からなる。猟場、河川、土地に対する管理、支配、地代を取り立てる権限をもつ）。さらにその次は勇士、随従（付き添い）、平民、貧戸、下層賤民、処罰を受けた人などからなる集落社会圏がある。
- (7) 日本統治時代にアラビア品種のコーヒーの栽培が導入され、当時は徳文集落及び泰武、佳平集落を中心に栽培が進められた。
- (8) 石板家屋修復工事とは、台湾政府は伝統工芸技術が途絶えること、また現代文明が原住民集落へ浸透するにつれ、文明で便利な生活が住居建物の要素を変えてゆき、石板家屋が急速に消失することを阻止するためにとった措置である。
- (9) 北大武山は古くからパイワン族に発祥の地であるとみなされてきた。人と神が共同に生活していた太古時代の PADAING 集落の伝説物語が文学・歴史研究文献にすでに記載されている（『蕃族慣習調査排湾族篇』）。
- (10) 今日の原住民文化学術研究者はもはや学問を研究することや、集落へ入ってフィールドワークを行い、論文を完成させ、学術的地位を獲得することを唯一の目的とせず、それと同時に自身の力の範囲内で、自発的に集落の困難の解決に協力することもある。
- (11) 清朝が台湾を統治していた時期、土着民を「生蕃」と「熟蕃」に分けた。生蕃は台湾の山地に暮らし、統治と教化を受けていない「野蛮人」の呼称であり、熟蕃は山麓平原地域に居住し、すでに統治下に組み込まれ、戸籍に編入され、税金を納める半開化の漢化した人々の呼称であり、「平埔族」とも呼ばれる。両者の間に関所・防線を設け、あるいは木柵や欄干を用いて隔離し、両者が紛争することを防いだ。